

修道生活という未知の世界。
「教育修道会」であるのに何の資格も持たず、
とび込んだこの世界。
学校使徒職に40数年。
そして
コミュニティ生活への奉仕。
そこで出会った多くの子どもたち、
その保護者たち、
共に働いた教師仲間、コミュニティの仲間たち
多くの人と関わりを持つ恵みが与えられ、
自分を育ててもらった。
神のいつくしみの中で信仰生活を続けられて
いることに、日々感謝している。

(初誓願 1969)

シスターメリー ドロシー 澤岷

家が、与那原カトリック
教会から歩いて20分の距
離に在り、姉が信者だった
ので教会にはよく行っていました。ある時、高校
生のための黙想会がありシスターヴィヴィアンとシ
スターフランシスが来られました。前から修道院
には関心を持っていましたが、その黙想会に参
加してからSSNDに惹かれ始め、その後真栄原
の修道院を探しながら訪ねて、シスターヴィヴィ
アンにお会いしました。

シスターヴィヴィアンは、真栄原での仕事をく
ださり、私がこれまで家を離れたことがなかった
と知って「修道院にしばらく泊まったらいい」と
言うので、そのようにしました。12月のこと
です。真栄原教会の雰囲気は開かれていて、シ



シスターテレーズマリー 早川

誓願生活を生きて50年



スターと信者さん、学校の生徒さんや先生方との
暖かい交わりがありました。SSNDのシスターた
ちの明るさが印象的でした。厳しいけれども優し
いでした。

そして、「神さまについて行きたい」という気持
ちで3月には京都に向けて出発しました。シスター
ヴィヴィアンは、本土から沖縄に来ていた大学生
グループの中にノートルダム女子大学の学生がい
ることを知り、本土まで初旅をする私が、彼女た
ちと同行できるよう計らってくださいました。那覇
から神戸までは船、そのあとはJRで京都に来ま
した。京都駅ではシスタークラリアとシスターピ
アが出迎えて下さいました。

(初誓願 1969)

シスターメリーレベッカ 我部

70年前、日本敗戦後の混
沌としたこの京都の地に神
の霊が働かれました。創世
記1章2節を思い出したのは、私一人でしょうか。
神の御業は、私たちの小さな頭で計り知ることは
できません。私たちの心も精神もきっと混沌とし
た状態だったのかも知れません。

私たちは、毎日、試行錯誤しながら今まで生
きてきたのでしょうか。時には神のみ旨だと言い、
時には時代や世代の違いだと言い、イデオロギー
の対立をしながら、正当化して来たのかも知れま
せん。

今この時こそ、神の似姿に造られた私たちは神
の前に謙遜に膝をかがめる時だと思います。真



理の源、私たちが生かし共にいてくださる神秘に
真正に心を開きたいものです。生きとし生きるも
の、一人ひとりの存在、神への忠誠さを生きてい
きたいものです。

『私は真理である』とイエスは私たちに語りま
す。神がお望みになる方法で、イエスに忠実に従
い、次世代のミッションのために真理を伝えてま
いりましょう。

(初誓願 1970)

シスターメリー パトリシア 久野



人間的、霊的の両面に
おいて、信頼し、受容し
あい、支えあう仲間に恵
まれたこと。この恵みによって豊かな修道生活を
過ごさせていただいたこと。修道生活の仲間と
神様に心から感謝いたします。

霊的人間的成長の面からそれぞれ深め、成長
させるため、その時々が必要に応じて、研修、
黙想、刷新等、様々な機会をいただいたことを、
感謝いたします。

おかげで、SSNDとしての修道生活も、個人と
しての人生も豊かにさせていただいたと、会と神
様に心から感謝いたします。

主イエスのみ名によって

(初誓願 1972)

シスタージャネット 田中



1983年に始められたネパールミッションに遣わされた私たちは、派遣当初、どのような奉仕ができるのかは未定で出発したのです。このミッションが本格的に始まったのは、バンディプールという小さな貧しい村人達の切実たる緊急ニーズを受けて、それに応えていくという中でのことでした。

貧しい人々の叫びとニーズに応じて出かけていくのは、ノートルダム教育修道女会の創立者、福者マリアテレジア・ゲルハルディングのミッション理念「私たちは呼ばれた所へ行く…」に適っていました。

貧しい人々を優先し、世界的視野をもって、教育に、特に女子教育に心をとめられた創立者マザーテレジアの精神は、この世界の果ての名もない小さな貧しい土地に住む、貧しい人々、家畜同様に扱われていた女性や子供達の教育ニーズに敏感に共鳴したのです。

「私たちにとって教育とは、神の似姿に創られたひとり一人の可能性は完全に開花させ、その賜物を、この世界を築き上げる方向に導くことである。…」

こうして、マザーテレジアの夢は、蒔かれ、徐々に根付き、年月を経て、見事に開花していきました。時として、私たちは、困難な状況に直面しましたが、着実に静かにゆっくりと事が成就していく中で痛感したことは、このミッションはとても人間業とは思えず、最初から神が手掛け、先駆けておられたということでした。私たちは、神のみ業、神の事業に参与させて頂いたのです！

私は、この小さな最果ての土地、バンディプールと云う村で、新たにSSNDの精神、マザーテ

レジアの心に触れたような、マザーテレジアに初めてお会いしたような不思議な感覚を持ったのです。

(初誓願 1973)

シスターメリーポーラ 岩城



中学校の1期生として、出来たばかりのノートルダム女学院に入学し、シスターと言われる方に初めて接し、このような生き方があったのかと、目からうろこの感じでした。その後、学校で毎日シスター方と一緒に過ごしているうちに、この人たちが信じていらっしゃるものを私も信じたい、自分もこのような生き方がしたいと思うようになりました。

修道会に入会し、誓願を立ててからは、ほとんどノートルダムの中学高校で教えていましたが、その間にサバティカルということで、2年間、ローマ総本部のキッチンで働いたことがありました。10か国以上のシスター方3, 40人と共同体生活をする中で、いろいろなことを学びましたが、お互い、言葉も文化も国民性も違う者たちが一緒に生活するのですから、時には齟齬をきたし、さまざまな葛藤もありました。そのような中でも1つの信仰に結ばれているという確信があり、これこそが国際修道会なのだ実感することができました。

特に、創立者マザーテレジアの列福式前後にローマに滞在できたことは大きなお恵みでした。列福の前年には、列福が本決まりになり、日が決まり、奉納に出る人、朗読をする人などが決

まり、それが発表されるたびに総本部全体に放送が入り、皆、何もかもおいて聖堂に集まり、テデウムを歌ったことなど、今思い出しても胸が熱くなるほどです。また、列福式の当日、式の中で、教皇様が列福を宣言され、マザーテレジアの肖像画が祭壇の上の方に掲げられた時の感動も忘れることができません。

マザーテレジアのことを学ぶ機会に恵まれ、「巡礼の旅」の引率などをさせていただき、ますますマザーのことを身近に感じられるようになりました。何もかも神様にゆだねて活躍されたマザーを創立者と仰ぐノートルダム教育修道女会のメンバーであることを誇りに思い、うれしく思うとともに、このマザーの精神がこれからも世界中に広がっていくようにと願い、祈っています。

(初誓願 1974)

シスターメリー ジョイス 宇栄原



洗礼を受けて3年が過ぎましたので、自分の思っている気持ちをお話する前に自分について真剣に考え、聖堂のそばを通る時は5分間のご聖体訪問をしたり、又、聖母マリアにお取次ぎをお願いしているうちにも、やはり自分の気持ちは変わりませんでした。神父様に将来のことについて勇気を出してお話してみました。神父様のお返事は「まず、祈りなさい」とおっしゃって、とにかく祈り続けました。学生会には、私と同じ志を持った方々が何人もいらっしゃいました。修道院に入会したい意向を口に出して言わないでくださいネ。誘惑がくるので。他の人

に話さないで神に祈る。私はそのようにしました。

12月8日、ミサの後で、主任神父様が「司祭館にいらっしゃい」と呼ばれました。神父様は「ノートルダムの母様にお手紙を書きなさい。」と仰いましたのでそうしました。二回ほどはお手紙でしたが3回目からは入会に必要な健康診断と衣服、たとえば、寝巻きが何枚だとか等々……。とにかく、とってもスピードが早い私はぜんぜんノートルダム修道院の方たちを知りません。京都といっても何も知らないのに何の不安もなく神父様にパスポートを取得するために英文タイプでタイプをさせていただいて渡航できるようになり、全ての手続きと準備が済むまでの約1ヶ月後、1月10日だったと覚えています。ノートルダム教育修道女会へ入会させていただきました。

(初誓願 1977)

シスターマリア アスタ 福島



私がノートルダムで学んだことは、「教育とは何か」ということでした。ノートルダムの会憲は「教育とは、神の似姿に創られた一人ひとりの可能性を開花させることを助けることである」と謳っていますが、私は実際の使徒職に携わっていてそれを体験させていただいたのでした。

女学院での六年間、私は芸術科の書道で、高2、高3のクラスを受け持ちましたが、この二年の間の彼女たちの上達ぶりは目を見張るものがありました。若くて、すべてが柔軟で根性のある彼女たちは、内面にいただいているものが見える形

にしてゆきました。

教育は、知識や技術を伝え、与えることではなく、ひとり一人が内にいただいている可能性に信頼してそれを開花させていくのを手伝うことなのです。

上達という形でそれは現れますが、上達するにつれて良い意味での自信が生まれ、自分も頑張れば何でもできるという実感によって、顔つきさえ変わっていくのを見させていただきました。多分それは他の教科にもいくらか影響していったのではないかと思います。

この体験の中で私は「可能性」という形のない「あるもの」に手で触れる思いがし、その人が創造主からいただいているその見えない「あるもの」に深い畏敬の念を覚え感動しました。

私が学校使徒職から離れた今も尚「書道教室」を続けさせていただいているのは、この「教育」のためなのです。人はやめさえしなければ、自分で限界をつけさえしなければどんな人も無限に可能性を開花させてゆきます。

聖書に「タラント」のたとえ話があります。(マタイ二五章十四節) 聖書は、私たちは夫々の器に応じて可能性(タラント)が与えられていて、それを使って増やしてゆくことが求められていると語っています。

私は、これからも人の可能性の開花を助けるという神様の業のお手伝いを、喜んで果たしてゆきたいと願っています。

(初誓願 1977)

シスターマリア 斎藤

私達のコミュニティには要



介護者のシスター A がいます。彼女は日常生活面で困難なことが多々ありますが、一生懸命に毎日を送っています。シスター A はコミュニティの中で一番シスター B が大好きです。なぜでしょうか。シスター B は積極的に共同体と関わるほうではありませんが、シスター A と話す時はいつも対等になっているからです。「一緒に~しようね。」と彼女の顔を見ながら話しかけています。この前などは TV をみながら、二人で楽しそうに笑っていました。ややもすると私達は要介護のシスター方に対して、上から目線になりがちにではないでしょうか。共同体の中で、一番立場の弱い人を大事にしていく。これが本当の共同体ですね。

(初誓願 1979)

